

谷川 雁 著

意識の海のものがたりへ

日本エディタースクール出版部

谷川 雁 著

意識の海のものごとへ

日本エディタースクール出版部

谷川 雁 (たにがわ・がん)

1923年熊本県水俣市に生まれる。東京大学文学部社会学科卒。詩人・評論家。西日本新聞記者をへて58年福岡県中間市で『サークル村』創刊、60年同市の大正炭鉱合理化に抗して大正行動隊を組織、65年上京、幼児・少年少女の外国語教育によるサークル活動に従事、81年以降「十代の会」「ものがたり文化の会」を結成。詩集『天山』『大地の商人』『谷川雁詩集』、評論集『原点が存在する』『工作者宣言』など。長野県黒姫山在住。

ものがたり文化の会・十代の会：東京都新宿区市ヶ谷八幡町1新高ビル 電話 03(267)4951

意識の海のものごとへ

一九八三年六月二十五日 第一刷発行

定価一五〇〇円

著者 谷川雁

発行者 吉田公彦

発行所 日本エディタースクール出版部

〒一六二 東京都新宿区市ヶ谷田町一六

電話(〇三)二六〇五八九一(代)

(〇三)二六七四九五二(直)

© 谷川雁 一九八三年

精興社印刷・複製本

虚空に季節あり

まえがきに代えて

会ったこともないきみ。二十年ぶりの便りをいろいろのふちに置いた。手紙は、魚のように觀念して天井をにらんだ。きみの知らないあの、すきまというすきまに古新聞をつめこんでも枯れ葉の舞っていた家——灰色と褐色の胎藏界まんだら——がどんな尾ひれを生やしたのかと調べている目つきだった。手紙は差出人よりもよく相手を知っている。

風が鳴っている胡桃の木のをしたを通して、郵便局員が届けたのだ。さっきまで栗鼠がぼろぼろ梢からこぼしていた皮をふんずけて。ヘルメットをかぶった制度。番号のついた地名。さて、地名と地表はどちらが大いに変わったろう。

変った、変らない。香具師の口上なみに時は移る。この時間は何色をしている。鬱金色かね。

「しばしの苟安をぬすみ、愉樂には遠く、人目につかず悶々と」。いや、こちらもご同様。「連合赤軍とイエスの方舟。これは事件ではなくて事象でしょう。そいつが七〇年代をやっとここではさみつけ、じゅっと水に入れてくれたおかげで……」。そうだった。だが熱い鉄としての事件は何だった

ろう。水俣病と日大闘争か。しかし、海を一つぶっ殺すのが事件とはねえ。とにかくこちらは大勢にそっぽを向く能かないものだから、汚ない街でいじいじと、人に唾を吐かれながらやっていった。どうせいつかは息があがって浮いちゃうと思っただけで、とうとう物陰からバアという仕儀になった。「ぼうふらの弁」でも送らねばなるまいね。なに、ご存じのとおり地道な報告などできないのだ。昔とちがったしゃっくりの癖がついたなあ、ぐらいに読んでほしい。

梅雨雲や信濃へ移る湯の道具。どうも俳句はうまくならないよ。杉並の寓居を引きはらったのは四年前のこと、どこと言って冴えたところのない大女のような死火山のふもとで木の名、草の名をおぼえようという寸法だ。なんと東京に十三年いたことになる。「東京へいくな」はどうした、とはやしたてられたがね。かつてきみが言った「直接話法の報い」というやつさ。こちらはふざけ返すどころじゃない。じぶんの言葉が骨髓のところまで病み、対象を失っているという知覚が日に日に強まっていたから、難破船の大手術をするつもりだったのだ。

「原因は大正行動隊の敗北でしょう」と人が言う。へたな歴史家のまねをしてくれるな。勝利などという観念からどれだけ離脱できるかを賭けた行動に、どのような質の敗北がありうるかをまず想像してみるがいい。事実は、筑豊百年の坑夫気質をはるかな彼方まで転調しつづけるという闘いの風合いが、ある地点で停止しただけである。しかし、それは生活者集団のプログラムにもともと印刷されることのない課題だ。その場合、敗北に冠せられる固有名詞は個々の人名でしかないはず

だ。ぼくの敗北は、ぼくの精神の転調の持続に関わる。だが、それを直ちに表現の放棄に結びつけるのは早とちりと言うほかない。ぼくはたっぷりご馳走になったのだ。坑夫の陰影はまぎれもなくぼくの脊椎に刻印された。

筑豊に足かけ八年いた。あの風景から言葉が浮かないように暮すのはなまやさしくないよ。三日気をゆるめたら、言葉が硬山ばたやまのてっぺんから陥落池にずり落ちる。そんな風に生きねばならぬ。新米の移住者には、この斜度が干渴かんかくのハゼみたいに苦しい。しかしこの世界は没落とともにあっけらかんと風俗の表層を変えていった。こんちきしょう野郎が昨日まで乗っていたさっそうたるスクーターは、今日は甲虫という名の軽四輪、明日はなにやら臭い家畜に似た四輪車という風に。気質と風俗のせめぎあい、うれしげに暴力をふるう体操教師のように声をうばっていく。そして無色の銭もうけ。目がまわるなと思ったとたんに、言葉は風景を追いかけようとしなくなった。

風景と肉体をつなぐものはやはり言葉であって、それ以外にはありえないと言え、なにがしかの反論をこうむることになる。だが風景と肉体の結びつきにまやかしがあるのが現代だという言い方が成り立つならば、そのとき言葉は風景からも肉体からも乖離しているとと言える。同時にじぶんという肉は浮腫むしうとしか感じられなくなる。古典的近代の鮮やかな疎外態であった筑豊が解体する。もうすこしそのまま「解体後」にすすわっていてくれれば、新しい文体が……と思うまもなく、高速乖離現象のコンベアにのっかって、すべては沖へ運ばれてしまった。それもまた、ひとつの普遍

性が病んでゐる証左であつたろうが。

だが病理を外界になすりつけても苦痛は消えない。告白や分析も同断だ。ぼくは試験管でじぶんの尿を透かしみるように考えこんでいた。えい、だれも気づいていない「構成」がどこにあるはずだ。それは感官をゆるやかなスウィングにまかせ、なによりも香氣の新奇さによってみちびかれねばならない。そこで少年少女と外国語。その熔接を野原でおこなえば、ぼくの言葉にも山羊の脚が生えるかもしれぬ。——このあたりはいつもたたかれる。論理の紋様が正統でないのだな。強いて言えばジブシー風か。

ぼくにはどんな感傷もなかったが、東京の街並みなど私的な感想をもって眺めたりはしなかった。十三年間ただの一度も。風景とはつきあうな。現実にたいしては留保また留保。地理も歴史もぼんやりかすんでいればいい。ただ陽気な亡霊であれ。まるで、すこし遊びをおぼえたかのようにだつたよ。すると、おかしなことに、風景と肉体の接ぎ目が見えるような気がしてきた。

肉体は風景の原基であると仮定する。風景は肉体の集合的表现であるとみなす。ならば両者はたがいに浸透しあう。一本の栗の木は五人のこども、というぐあいだ。では、そのうちの二人のこどもが一隻のボートになることはたやすい。そして栗の木が踊り、ボートが歌うことになんのふしぎがあろう。物が肉体としてふるまうことが舞踊の始源である。肉体が物をまねることではないのだ。そこを支えきったとき、ぼくの言う物語が発生する。

してみれば、物語のナレーションはいと大いなる、遠い風景の放つ声であり、小風景と肉体の相互変換を命じているのだ。ダイアローグは大いなる風景への小風景の応答を起源にし、そこから小風景相互のやりとりで転じたものだ。肉体がはじめにあるのではない。肉体とは風景から還元され、析出された自由な結晶のことだ。——ぼくはずいぶんたくさんの幼児の行動を見たよ。言葉を離れ、幻影の脈絡にじっくりおさまって、他者となっているかれらを見た。それを見ているうちに、ぼく自身がかれらの前の一風景になっていくのを感じる。これは、市場ではめったに売られていない酔い心地だ。

じつを言えば、幼年時代のぼくは表現にかけては無能の代名詞だった。じぶんのすくいにとっている風景を描けば、みだらで過激な光線にあふれることになると感じ、ひたと両手でかくしていた。ぼくは青年期に突然禁忌を破った。そのことが何を意味するか。たぶんどこかで未払い手数料の清算を迫られるにちがいない。この意味で、運命もまたぼくに少年少女の前でコック帽をかぶる役を用意していたらしいのだ。へへ、ぼくは調理人としていきいきと働らいているんだぜ。信じてくれたまえ。この偏屈なのっぽの初老を、実物を見ないうちのかれらの多くは、ふとっちょで気さくな小男の作者と感じている。うたがいもなくそれは、半世紀を逆さまにおしこまれて笑っているぼくの幼年なのだ。

虚空はまだつづいているさ。新しい文体には遠いからね。だが、ふと思う。いまとなつては高度

成長をビエロのように冷笑する声にみちているが、その真の障壁は解説されていない、と。これは戦争以上じゃないかね。戦争は人間を一気に死の淵に立たせることによって、精神を白髪化する。こどもを三日でおとなにする。しかし語弊を恐れずに言えば、すくなくともそこに早激的な成熟がこる。まあ、ぼくなどもその作用で〈詩〉を書いたということになるのだろうな。

ところが、この成長という名の幸福マラソンはどうだ。こどもは機械人形、おとなはアルコール漬の幼児。寿命までひきのばして、ゲート・ボールをやらせる。死を読むことなしに、文体など生まれっこないよ。「季節感がなくなった」という歎きがある。そのつぎにビニール・ハウスとくるのがおかしいね。季節——輪廻のみなもと——と肉体の相互浸透を感じないというのは、肉体が輪廻をこぼむからだ。たとえば海辺のテトラポット、あのひとつがおまえだよと指されちゃかなわないというわけだが、それはなぜだ。あちらを完全に死物と認識するゆえに、こちらの成熟の停止があからさまに見えるからではなからうか。しかし、あちら石灰岩の粒子の心境はどうなのか。幾億年も文体を変えないつもりか。そうではあるまい。もしかすると新宿の高層ビル群などは、秩父武甲山の山塊がやがておとずれる東京湾の海進を見越して、なつかしい波と一歩でも早く抱きあうべく、からめ手から人間をあやつった陰謀の結果かもしれぬ。

風景と肉体の交換性をそこまでおしつめないと季節感が生まれえない時代。かつては神話と幼児の関係としてどこかのすみにころがしておけばじゅうぶんだった〈無性・非人格の物の肉体化〉能

力を、いまやキューリやナスを噛むことにかえて、おとながぎりぎりに投入しなければならない。そうして得られる輪廻の感覚を、人間の等身大を超えた領域ですくいとらないかぎり成熟を許さない、とどこかで宣告している声がある。きみ、これがいまの季節じゃないですか。

それにしても、二千年来の文体障害社会。さまざまの切り身文体の即売セールはいつも盛況だね。せめてぼくは漢訳大藏經の方角だけは鬼門にしようと思っているが、なかなかむずかしい。これこのとおりのまずいお経さ。ままよ、木の名、草の名をまどろっこしい鞭にと考えたりもするけれど、ご存じの気短かさは蔽うべくもなし。「植物は芽を出すとき名札をつけて登場せよ」とか、「あの世でいま一度会いたいと思わない草の名をおぼえる気はない」とか、「つまらない植物名はみんな改名してやる」とか息まいて、同居の婦人に笑われている始末だ。

著 者

意識の海のものがたりへ
目次

虚空に季節あり まえがきに代えて

意識の海のものがたりへ……………一

宮沢賢治への旅

魂の水飲み場をもとめて……………一七

“兄の声”に応えて遊べ……………二七

何が賭けられたのか……………『注文の多い料理店』序をめぐって……………三三

山猫を知らない少女へ……………『どんぐりと山猫』……………四二

「神隠し」のカギを隠す……………『オノモリ狼森とオノモリ盗森』……………四七

「水仙月」はどこからはじまったか……………『水仙月の四日』……………五三

迷路の手ざわり

青の発見 「テーマ活動」ノオト

歌うように豆の木がゆれる	『ジャックと豆の木』	六二
しっぽの曲った建築家	『三びきのコブタ』	六五
王位継承の幻想	『猫の王』	七〇
地獄を選んだ二人	『ロミオとジュリエット』	七五
雨夜の灌頂	『耳なし芳一』	八〇
漂泊する鏡とその色	『鏡の精』	八五
1 雨はどこから降ってくるか	『だるまちゃんとかみなりちゃん』	九二
2 「うそっこ」の「うそっこ」	『ピーター・パン』	九四
3 夜をこどもに	『かいだんこぞう』	九六
4 青の発見	『白雪姫』	一〇三
5 神の誕生を見た女の子	『山もっこり』	一〇七
6 王女のケルト語	『グリーンシュ』	一二二
7 四つんばい	『すてきなワフ家』	一二七

8	『国生み』冒頭の条理	『国生み』	二三
9	美醜観念の一回転劇	イザナミの死	二六
10	ビロウとカエデ	『わだつみのいろこのみや』	三三
11	固有純粋を排す	『ナイチンゲール』	三五
12	ネコの「してやったり」	『長くつをはいたネコ』	三九
13	正月くるぞ		四四
14	三日月形の激情	『アリ・パパと四十人の盗賊』	四八
15	小人と妖精の間		五二
16	物語と詩の接ぎ木	『かえると金のまり』	五七
17	時間の城にかくれた小やぎ	『おおかみと七ひきの小やぎ』	六一
18	糸まきのころがった道	『ホッレおばさん』	六六
19	外来者による再生	『鯨人のなみだ』	七二

「人体表現」をとおして

非行劇団としての学校へ	一七九
-------------	-----

目 次

ことばでないことば	一三
私たちのテープの条件	一六
根の国の力 少年少女との対話	一七
「神話ごっこ」の十五年 あとがきに代えて	一八
初出一覧	

意識の海のものごとへ

